

学校では教えてくれない、 お金との付き合い方

小豆島中央病院
津山紀彦

はじめに

大人達は心を捨てろ捨てろと言
うが、俺はいやなのさ 退屈な授
業が俺達の全てならば〈中略〉盗
んだバイクで走り出す 行き先も
解らぬまま 暗い夜の帳りの中へ

いきなり四〇年前の曲を引用して、
戸惑わせたかもしれません。一九八

〇〇九〇年代にかけて活躍した歌手、
尾崎豊のデビュー曲『15の夜』の一
節です。当時の若者を熱狂の渦に巻
き込んだこのヒットソングも、四〇
年が経過すると受け止め方もずいぶ
ん変わってきたようです（「バイク
を盗むなんて、人に迷惑をかける行
為はダメでしょ」という具合に）。
それでも、「退屈な授業」を受ける
場所としての学校のイメージは、昔
も今もあまり変わらないかもしれま
せん。

尾崎が活躍した当時の日本は、そ
れまでの急速な経済成長に停滞の兆
しが見え始めていた頃でした。この
時代を「バブル崩壊」あるいはその
後に続く「失われた三〇年」として
政治経済の授業で習ったことがある
でしょう。え？ 記憶にない？ う
ーん、そうかもしれない。グローバ
ル化、資本主義経済、世界金融市場
なんかは、授業を受ける私たちにと
ってまるで自分とは無関係な絵空事
のように感じられたかもしれません
（私も、「神の見えざる手」くらいし
か覚えていません）。とは言え、今
を生きる若者にとって日々のお金の
やりくりは切実な問題ですし、最近
の物価上昇から経済の劇的な変動を
身に染みて感じているはず。こ
の記事では、そんな現代を生きるた
めに必要な、それでいて学校では教
えてくれない「お金（経済）」と
「心」の関係を探ってみましょう。

離島の臨床心理士

自己紹介が遅れました。私は香川
県小豆島に住み、島の総合病院で心

理専門職として勤めています（つま
り経済の専門家ではありません）。
離島はなかなかユニークな場所で、
近所の方から畑で採れた新鮮な野菜
や釣った魚を気前よく分けていただ
くことがよくあります。また、地元
の商店で買い物をする際には、「店
員の〇〇さん」「いちご農家の△△
さん」といった顔なじみの結びつき
が生まれることもしばしばあります。
離島というアクセスが不便な場所
は、資本主義経済の枠組みの中にあ
りながらも、都市部とは異なる助け
合いの原理が働いています。もちろ
ん、離島であつても孤独や孤立、貧
困といった社会問題は存在しますが、
これらの問題はしばしば地域社会の
相互扶助によってケアされています。
では、こうした離島の原理とはどの
ようなものなのでしょう。心豊か
に生きるヒントがここにありそう
です。

お金を増やす呪文はない

先にお断りしておく、この記事
では心理学理論を駆使してお金儲け

の秘訣を伝授するわけではありませ
ん。実際、お金を増やす魔法の呪文
なんて存在しません。いや、まあ完
全に否定するわけにもいかないかも
しれません。「オルカン!」とか
「エスアンドピーゴヒャク!!」とス
マートフォンに向かって呪文を唱え
れば、お金が増えることがあるかも
しれません(もちろん、減ることも
…)。お金の問題は私たちの人生に
常に付きまといまいます。例えば、学費
の支払い、奨学金の返済、初めての
就職で知る税金の額、結婚、子ども
の誕生、ローン、などなど…:人生の
様々な局面でお金の問題に直面し、
経済の循環と再分配のメカニズムを
目の当たりにするなかで、お金(経
済)が個人の利益のためだけではな
く社会全体にとっての価値を向上さ
せるために設計されていることを少
しずつ理解するようになります。

「稼ぐことだけではないお金(経済)
との付き合い方」を知っておく必要
がありそうです。

「贈与」の価値

「稼ぐことだけではないお金(経
済)との付き合い方」とは一体どの
ようなものでしょうか。ここでは、
「贈与(よりカジュアルな言葉では
「奢り」)」というヒントを挙げてお
きましょう。例えば、コンビニで缶
コーヒーを購入する際、お金を受け
取る店員が何者であるかは、通常、
私たちにとって大きな関心事ではあ
りません。しかし、学校の帰り道に
友人から奢ってもらったコーヒーの
味は、何年経っても色褪せることな
く記憶に残ります。この違いは何で
しょうか? それは「奢り」という
行為に、単なる金銭のやり取り以上
の価値が含まれているからです。奢
るという小さな行為は、ただ喉を潤
す200ミリリットルの飲み物とい
う価値を超え、その瞬間に交わされ
た気持ちや関係の深まりを象徴して
います。私が離島で受け取り、そし
て返礼している数々の恵みも、贈与
のひとつのかたちと言えます。もち
ろん、贈与という行為も決して万能

ではなく、その弊害も常に考えねば
なりません。例えば、後輩に気前よ
く奢ったとしても、翌朝自分の財布
が空だと気づいたら、かなり痛い目
に遭いますよね。身の程にあった
「小さな贈与」を行っていくことが
大切です。

きみのお金を誰かのために

戦争、疫病(ウイルス)、地球沸
騰化(温暖化)、経済格差…:いまの
地球がどんな危機に見舞われている
か、一週間分の新聞をパラパラとめ
くると大体把握できるでしょう。こ
のような不安が漂う世の中で、私も
時々、気持ちを軽くするために「出
よりニーサ!」と呪文を唱えてみた
ります。ですが、それと同時に、
庭で採れたレモンでシロップを作り、
近所の知り合いや友人に配ることで、
飲んだ人の心が温まることを願うよ
うな贈与の実践も大切にしたいと思
っています。

冒頭に挙げた『15の夜』の続きに
はこう歌われています。

闇の中 ぼつんと光る 自動販
売機 100円玉で買えるぬくも
り 熱い缶コーヒー握りしめ

かつて100円玉で手に入れるこ
とができた缶コーヒーの温もりも、
値上がりにより今では一段と高価な
ものとなりました。経済の変動と連
動する私たちの生活では、求める温
もりの希少さと価格が変わっていま
す。ただお金を稼ぐことが幸せへの
道とされがちですが、困難な時代だ
からこそ、賢く投資しつつ、誰かに
温もりを与えられるような「稼ぐこ
とだけではないお金(経済)との付
き合い方」を見つけることが肝心で
しょう。これは学校では教えられな
いかもしれませんが、人間関係を豊
かにし、より良い社会を目指してい
くために貴重な教訓です。

JASRAC # 2405294-401

